

4 3 0 年以上の時が流れても . . .

風化せずに続く鎮魂の祈りの場へ

『長篠の戦い』の古戦場 長篠城趾・設楽原を巡る



【『長篠の戦い』の古戦場跡（設楽原）に復元された織田・徳川連合軍の馬防柵】

☎ 4 4 1 - 1 9 4 5

新城市玖老勢字新井9番地

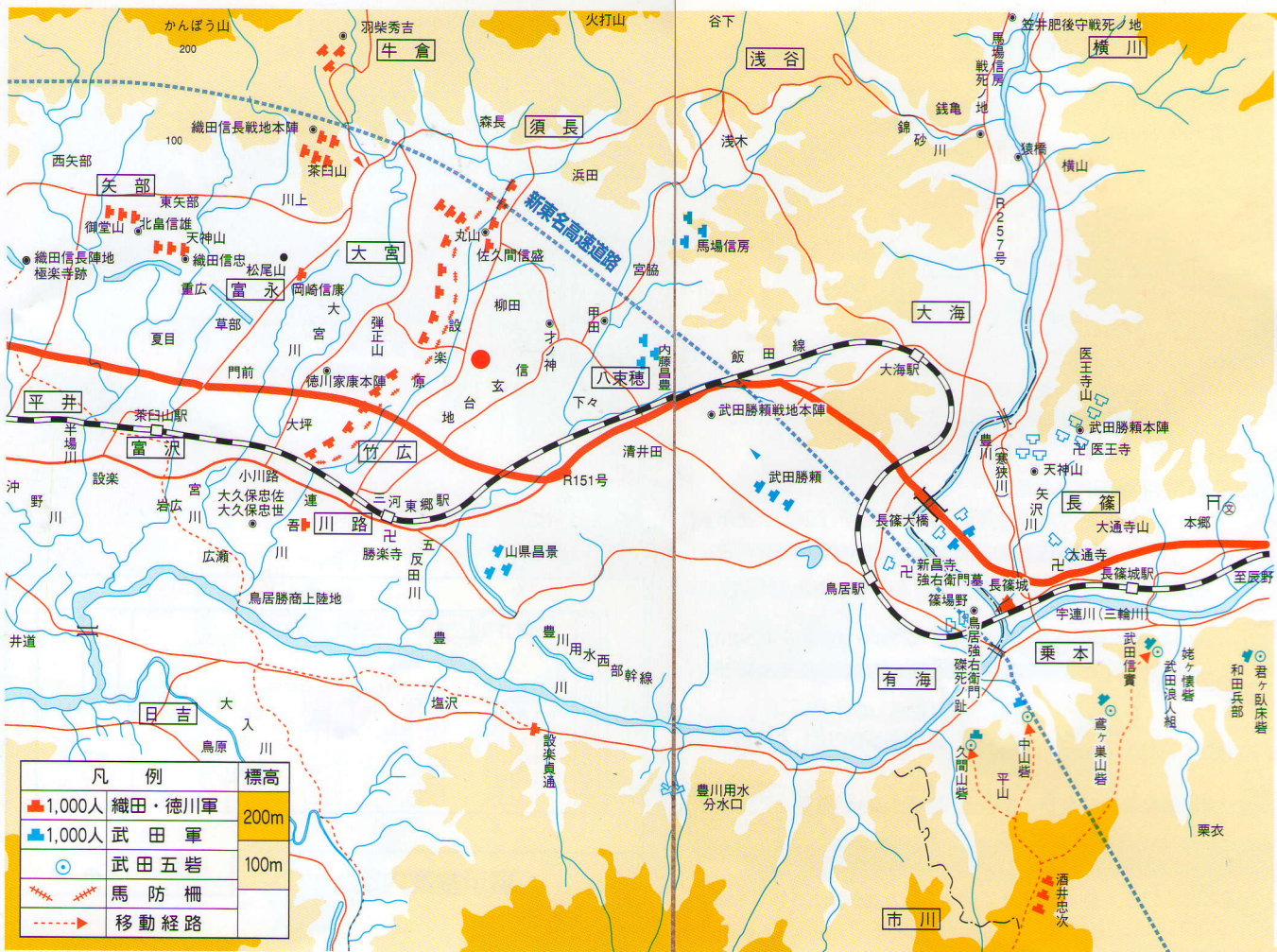
山びこの丘：民俗伝承館 大 林 輝 久

電 話 (0536) - 35 - 1191

FAX (0536) - 35 - 1193

長篠・設楽原戦図

天正三年(一五七五)五月十一日未明
織田・徳川軍、武田軍の配陣



● 設楽原歴史資料館 ▲ 長篠城址史跡保存館

もうこう
武田軍1万5千の猛攻に耐えた長篠城、織田・徳川軍の大勝利となった設楽原決戦。

長篠・設楽原の戦い

武田信玄の跡をついた勝頼は、天正3年(1575)5月、1万5千の軍を率いて長篠城を囲んだ。城主奥平貞昌(後の信昌)は21歳、5百の城兵と共にこれを防ぎ、鳥居強右衛門勝商の決死の働きもあって、織田・徳川の援軍3万8千は設楽原に進撃し、連吾川に沿って陣地を築き、武田軍の進撃を待った。当時最強を誇った武田軍は、織田・徳川連合軍が放った多数の火縄銃の前に敗れ、名将勇士を失った。

この戦いによって武田氏は没落の途につき、織田・徳川の勢力は絶対的なものになった。まさに関ヶ原、小牧・長久手の戦いと共に、日本史上重大な意味を持つ戦いであった。

*長篠合戦図屏風(豊田市指定文化財) *所蔵:豊田市郷土資料館(旧蔵:浦野家)

当時の将士年令

武田軍	織田軍	徳川軍	奥平軍
武田 勝頼 30歳	織田 信長 42歳	徳川 家康 34歳	奥平 貞昌 21歳
馬場 信房 62歳	織田 信忠 19歳	徳川 信康 17歳	奥平 勝正 40歳
内藤 昌豊 60歳	織田 信雄 18歳	酒井 忠次 51歳	鳥居 勝商 36歳
山県 昌景 54歳	金森 長近 52歳	本多 重次 46歳	生田 勝重 26歳
横田 綱松 51歳	佐久間信盛 48歳	大久保忠世 45歳	山崎 信宗 25歳
鎌原 重澄 49歳	柴田 勝家 46歳	奥平 貞能 39歳	奥平 定次 24歳
真田 信綱 39歳	羽柴 秀吉 39歳	松平 伊忠 39歳	奥平 勝吉 22歳
三枝 守友 38歳	前田 利家 38歳	鳥居 元忠 37歳	奥平 貞友 21歳
小山田信茂 36歳	佐々 成政 37歳	菅沼 定盈 34歳	
武田 信實 33歳	山内 一豊 31歳	平岩 親吉 34歳	
初鹿野昌久 32歳		本多 忠勝 28歳	
土屋 昌次 31歳		榊原 康政 28歳	

《『日本戦史長篠役』を参考》

1. 『長篠の戦い』のあらまし

1575（天正3）年5月（旧暦），武田勝頼は1万5千人の大軍を率いて甲府を出発し、西へと向かいました。目的は武田信玄の死を知った徳川家康の策略によって家康方に寝返った奥平貞能・貞昌親子のうち息子奥平貞昌が籠もる奥三河の要とも言える長篠城を武田方に奪還することでした。

この年の2月，徳川家康は2年前に武田方を寝返って徳川方についた奥平貞能・貞昌のうち息子の貞昌（当時21歳）に長篠城を与え武田方の攻撃に備えさせました。勝頼にしてみれば裏切り者を許す訳にはいきません。また，徳川方への寝返りの代償として人質であった弟奥平仙千代と許嫁であったおふうを鳳来寺山の麓で処刑されている奥平貞昌としても，勝頼に絶対に降伏することはできません。家康にしてみれば，奥平貞昌は絶対に徳川方を裏切って武田方にはつけないという立場に置かれているという状況を読んだの巧みで冷酷とも言える長篠城への配置でした。徳川と武田の二大勢力に翻弄された『山家三方衆』と呼ばれる奥三河の小豪族のひとつ奥平家の哀れさが見えるような気がします。長篠城を巡る動きは右の年表をご覧ください。

さて，勝頼軍の進路は信玄が都を目指した時と同じでした。甲府からは現在の中央自動車道やJR中央線が通る八ヶ岳と南アルプスに挟まれた谷を諏訪湖へと進みます。諏訪湖の手前で杖突峠を越える道を南下して武田家の拠点の高遠へ，そこから西に向かい天竜川の広い谷に出たあとは南に軍を進めます。飯田あたりまでは開けた伊那谷の進軍ですから，大軍の移動もさほど困難ではなかったと思われます。しかし，伊那谷が狭まり天竜川が深い谷を穿つ前に飯田付近で天竜川を越え，左岸に出て天竜峡の狭隘部を越え奥深い赤石山脈への険しい道へと軍を進めると状況は一変します。幾つもの峠を越え，深い谷を見下ろす細い道を武田の大軍は三河に向かって進軍したのです。

武田と徳川のはざまで 戦国の長篠城

1508(永正5) 今川氏親に属する菅沼元成は長篠城を築く。山家三方衆長篠菅沼氏。

1560(永禄3) 織田信長、今川義元を桶狭間に襲って倒す。

1561(永禄4) 城主菅沼貞景、今川氏真を見限って松平元康(家康)に従う。

1569(永禄12) 菅沼貞景、徳川家康に属して今川氏の掛川城を攻め天王山で討死。

1571(元亀2) 長篠城は武田軍(秋山、天野)に攻められて降参し武田信玄に属す。

1572(元亀3) 城主菅沼正貞は、武田軍に属して三方原で徳川家康軍と戦う。

1573(元亀4～天正元) 野田城を落した信玄は長篠城で休養、三河から伊那路へかかるあたりで死去。4月12日、53歳。

徳川家康は長篠城奪回、城主菅沼正貞は家康に内応したとして武田軍に捕えられる(8月)。武田軍に属していた奥平貞能、貞昌父子は離脱して徳川軍へ投じる
奥平氏の人質を武田軍処刑。(9月)

1575(天正3) 2月、徳川家康は長篠城を奥平貞昌(21歳、後の信昌)に与えた。貞昌は急ぎ城郭の修理補強を行う。5月、武田勝頼来襲、猛攻に耐えて家康の期待に応える。

1576(天正4) 長篠城を現在の新城市へ移築。家康は、長女亀姫を信昌(貞昌)に嫁がせ、かねての約束を果たす。

それでも、この険しいルートは古代から『秋葉街道』のひとつとされ、伊那地方と遠州・三河を結ぶ大切なルートでしたから、都を目指した父信玄も当然のようにこの険しい道を選んだのです。

中でも難所だったのは『青崩峠』でした。この峠付近は日本を南北に分ける中央構造線の大断層帯が走っていて、名前の通り青色（緑色）のもろい岩が露出しており、崩壊が頻繁におき、旅人を悩ませました。（21世紀の今でも、浜松から北上する国道152号はこの青崩峠の前後はクルマの通行は不能です。地図には掲載されていても実際にはクルマが通れない国道としてTVのクイズ番組に出るなどして、変に有名ですが、それほどの難所とも言えます。現在も青崩峠越えには人が歩いて通れる細い道がありますが、少し強い雨が降ると崩壊したり落石があったりと極めて危険なルートです。クルマが通れる道の建設計画はありますが、なかなか実現しません。）

青崩峠を越えて南下した武田軍は北遠州から三河に入りました。そして、5月6・7日に豊川の河口近くまで進出して吉田城（現在の豊橋市）を囲みますが、翌8日には軍を引き返し長篠城を囲みます。長篠城には奥平貞昌と城兵500が立て籠もっていました。

長篠城は大きな城ではありません。しかし、南東を流れる宇連川（当時は大野川と言いました）と北西から流れる寒狭

川（滝川とも言いました）が合流地点の崖の上につくられているため南東側と北西側は二つの川がつくる深い谷が天然の堀の役目を果たしています。また、北東から北西

大勢力の狭間で必死に生きた

『山家三方衆』とは

戦国時代、険しい山々と深い谷が続く奥三河を勢力範囲にした三つの小豪族がありました。これらの豪族の総称を『山家三方衆』と呼びました。

○ 作手の奥平氏

○ 田峰の菅沼氏

○ 長篠の菅沼氏

の三氏です。

この奥三河は北の武田氏、東の今川氏、西の松平氏（後の徳川氏）という三つの強い勢力の重なり合う地域でした。それだけに、弱小豪族の『山家三方衆』は“風にそよぐ葦”のように、常に時の強力な勢力に従うという一見優柔不断な態度を取るという生き方で自らの『家』を守ってゆこうとしていました。また、これら三氏は様々な方法で結びつきを強めていました。弱小豪族にはこうした方法でしか自らの勢力を守ってゆけなかったのです。

その後、長篠の菅沼氏は勢力を失い田峰の菅沼氏は武田家と運命をともにします。最終的に、武田方から徳川方に寝返った作手奥平氏が長篠城に入り『長篠の戦い』の功労によって重く用いられ、後に豊後の中津藩の大大名となります。出世のきっかけになったのが『長篠の戦い』だったのです。

方も深い空堀や土塁で護られており、攻めにくく護りやすい城になっています。

さて、これまでは、教科書や文学作品などでは5月8日～21日までの一連の戦いを『長篠の戦い』と総称してきました。しかし、地元新城市の『設楽原をまもる会』を中心に『長篠・設楽原の戦い』との名称が定着するようにと努力していますが、まだまだ一般的にはなっていません。学者によって、説が分かれるためです。そのため、この資料も従来通り、『長篠の戦い』で述べています。

2. 戦いが始まった

5月8日、長篠城を攻め落とそうと包囲攻撃を開始した1万5千人の武田軍と、そうはさせないと必死で城に籠もる奥平貞昌以下500名の城兵との戦いから始まりました。いかに難攻不落の城と言うものの補給路を断たれていますから持久戦となると勝敗は明らかです。降伏できない立場に置かれた奥平貞昌も最後には万策尽きて落城するしかない状況に置かれました。

一方、長篠城を囲んだ勝頼を見て“チャンス到来”とばかりに行動を開始したのは織田信長です。天下統一のために邪魔になる最大の敵である武田の勢力をここで叩いて一気に弱体化させようという意思があったと思われます。そして、歴史に残る激しい戦いが緩やかな丘が幾重にも重なる複雑な地形の設楽原で行われました。練りに練った作戦でこの戦いに勝利した信長ですが、一気に武田氏を壊滅させるまでのことは考えてはいなかったようです。その証拠のひとつが、設楽原の決戦でほぼ勝利が確かになった段階で、

「深追いをしてはならぬ！」

と、敗走する武田軍を追うことを厳しくとどめたと史料にあることです。追撃して三河の深い山の中に入れば、地形に慣れた武田軍の反撃に会い手痛い打撃を負うことが

長篠の戦い経過

1575(天正3)5月

- 6・7日 武田勝頼 吉田城(豊橋市)に迫って小ぜりあい。
- 8日 武田勝頼(1万5千)長篠城(奥平貞昌、5百)を囲み攻撃開始。
- 10日 大手門付近で戦闘、城兵門外突出。
- 11日 豊川対岸の武田軍、筏で野牛郭を攻撃。城兵も多数死傷するが撃退。
- 12日 武田軍、本丸西隅に横穴を掘り侵入、城兵は逆襲して退ける。
- 13日 武田軍は瓢郭を攻撃、夜、瓢の兵は本丸へ引き上げ。大手門方向に建てた望楼を城兵は銃撃で破壊。
- 14日 武田軍総攻撃を城兵死守。鳥居強右衛門、奥平貞昌の命を受け脱出。
- 15日 強右衛門は岡崎に到着し家康に言上。織田信長も岡崎到着(泊)。
- 16日 強右衛門は武田軍に捕われ、城中へ援軍到来を告げて磔にされる。
- 18日 織田(3万)、徳川(8千)軍設楽原到着、布陣し陣地構築。
- 19日 武田軍は軍議、勝頼は諸将の諫言を容れず、設楽原の敵陣攻撃を決定。
- 20日 武田本隊は城の包囲を解き設楽原へ、徳川軍酒井隊は鳶が巣方向へ。
- 21日 設楽原で激突、勝頼は多くの将士を失い残兵に守られて敗走。

予想されたからだと思います。事実、武田軍を追って現在の新城市玖老勢地区まで進出した徳川軍ですが、夜になって態勢を立て直した武田軍の反撃を受け逃げ戻るということになりました。信長はそうした状況を予測して慎重に行動したのです。

この『長篠の戦い』の戦いについては従来、鉄砲という近代兵器の大量使用という作戦で望んだ織田・徳川連合軍と、旧来の騎馬中心の用兵で戦いに望んだ武田軍が激突した“新旧の激突”という非常に分かりやすい解釈がなされていました。しかし、最近の研究では、どうも、そうではないようだ、ということが次第に明らかになってきました。例えば“3千挺の鉄砲”です。従来言われていた鉄砲の数も、本当に3千挺だったのかは明らかではありません。また、史料によれば、この鉄砲隊は信長直属の部隊だけでなく信長に従う武将からも集めました。言ってみれば、統一の取れた部隊ではなく“寄せ集め部隊”とも言えました。ここを、長い間見過ごしていたため、『三千挺の鉄砲の三段撃ち』という虚構が大手を振って歩くひとつの原因になったようです。そんな疑問も解き明かしてみたいと思います。

武田軍の襲撃の勢いを削ぐための馬防柵を組むために岐阜から兵に丸太を担がせて設楽原へ入った信長の行動や、信長に従いつつも自らは最前線に本陣を置いて武田軍に対峙した家康の行動、長篠城から脱出して家康のもとに援軍要請のために走った鳥居強右衛門勝商の行動と壮烈な最期、信玄以来の老将の進言を聞き入れずに設楽原での決戦に挑んだ勝頼の行動など、興味深い点がある戦いには間違いのないようです。

3. 『長篠合戦屏風図』は正しく戦場を描いたか？

ところで、長い間『長篠の戦い』については、

「織田・徳川連合軍が3千挺もの鉄砲を馬防柵の後ろに配置し待ち構えているのに、武田軍は常勝と言われる騎馬軍団で正面から攻撃した。しかし、連合軍は3千挺の鉄砲を三段に分けて使用し、火縄銃の欠点である次の発射まで時間がかかることを克服して連続発射を行ったため、ぬかるんだ連吾川のために行動の自由を失った武田の騎馬軍団は切れ目なく飛んで来る連合軍の銃弾のため、壊滅的な損害を受け、名だたる武将の多くを失ったあげく、ついに敗走した・・・。」

とされ、

「この戦いは鉄砲という近代兵器の大量使用という新しい戦い方をした織田信長が、騎馬による戦いという旧来の戦法に固執した武田勝頼に勝ったという点で日本の戦国時代の大きな分岐点になった戦いである。革新的な織田信長と伝統に固執した武田勝頼とではどちらが勝利するか明らかである・・・。」

という認識が一般的な見方でした。

でも、これでは織田信長はハイテク技術を積極的に取り入れた先進的で聡明な武将

であるのに対して、武田勝頼は旧来の戦法に固執する保守的で愚鈍な武将というイメージになってしまいます。本当にそうだったのでしょうか。

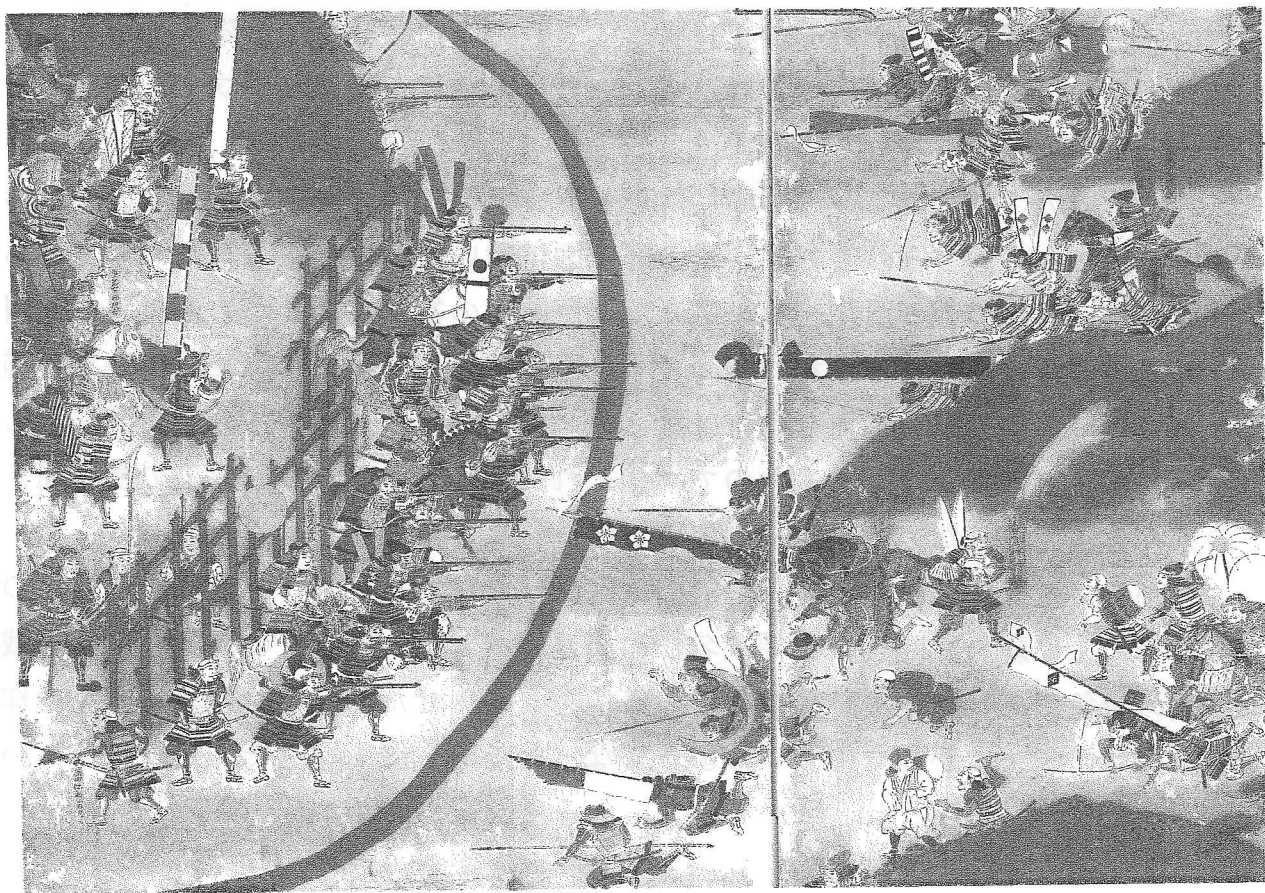
今、『長篠の戦い』については研究が進み、従来の私たちの認識とはかなり違った姿が明らかになってきました。

まず、『鉄砲隊』VS『騎馬隊』という、まるで幌馬車隊を守る騎兵隊に馬に乗ったインディアンが襲いかかるという古典的な西部劇のような、極めて分かりやすいイメージを私たちが持って来たのはなぜでしょうか。そして、本当の『長篠の戦い』はそんな単純なものだったのでしょうか。私たちに『鉄砲隊』VS『騎馬隊』という単純にモデル化された戦いのイメージを植えつけた一つの原因が、小学校から中学校、果ては高等学校の歴史の教科書のほとんどに掲載されている『長篠合戦屏風』の写真（下の写真はその屏風図の一部分です。この部分が、どの歴史教科書にも掲載されています。）です。馬防柵の左側から右に向かって一列に並んだ鉄砲足軽隊が一斉射撃をしている場面ですから、どなたも思い出されると思います。その鉄砲隊の右に描かれているのはもんどりうって倒れる多数の騎馬武者の姿があります。

「鉄砲に馬で立ち向かったって、かないっこないよな・・・。」

と、子ども心にも強烈な印象を得たのではないのでしょうか。

あの『長篠合戦屏風』は多少の描き方の違いはあっても、何枚も残っています。中でも一番有名なのは犬山城に保存されている『成瀬家』の屏風図で教科書や参考書、歴史の解説書などには、この『成瀬家』の屏風図が最も多く使われています。で、最も多く使われているから正しいか、ということそうとも言えないのです。



この屏風図には戦いの模様がダイナミックに描かれています。三人の主要人物である織田信長・徳川家康・武田勝頼は見る者全てが一瞬のうちに分かるように描かれていますし、両軍の代表的な武将もきちんと描かれています。構図も優れています。六双の屏風のほぼ真ん中に連吾川と馬防柵が描かれ、その左右に攻める武田軍と守る織田・徳川連合軍を描くという緊迫感溢れる構図になっています。また、時間を超越して、右下には武田軍が総攻撃を始める大きなきっかけになった5月21日早朝の吉田城城主酒井忠次による『鳶ガ巢山』奇襲の様子が描かれていますし、右上には敗走する武田軍の殿（しんがり）をつとめ、勝頼が寒狭川を越えて逃げて行くのを確認したあと、堂々と討たれる武田の老将馬場信春が描かれています。言ってみれば、この六双の屏風で『長篠の戦い』の決戦となった5月21日の早朝から午後までの9時間に及ぶ壮烈な死闘の様子が誰にでもわかるようになっているのです。

私たちは、この屏風があまりに巧みに描かれているため、「そうか・・・戦いはこんなふうに行われたのだ・・・。」と全面的に信用してしまったのです。

でも、六双の屏風に戦いの全てを描きこむことは到底不可能です。そのため、大胆な省略が行われています。連吾川に迫る武田軍はほとんど全てが騎馬武者です。馬防柵に迫ろうとする武者もいますが、多くは馬を倒され、あるいは鉄砲の弾を浴びて倒されています。一方、織田・徳川連合軍は鉄砲足軽部隊はたくさん描かれています。騎馬武者や弓矢部隊・長柄の槍を持った部隊、それに徒士部隊はほんの飾り程度にしか描かれていません。つまり、織田・徳川連合軍は『鉄砲部隊』、それに対する武田軍は『騎馬部隊』と、それぞれを誇張して『鉄砲隊』VS『騎馬隊』と描いているのです。様々な戦いが繰り広げられた激しい戦場の様相を極端にデフォルメしたと言っているほど単純化しているのです。

この屏風の『鉄砲隊』VS『騎馬隊』という上手な情報管理に、後世の私たちもすっかり騙されてしまったのです。この屏風図は戦い直後につくられたものではありません。戦いそのものが風化しつつあった江戸時代の初期に、しかも、織田・徳川方の成瀬家の要請によって描かれたものですから“戦場の模様を冷静に見て公平に描く”という点でも割り引いて見なければならぬのに、私たちは、この屏風図が正しく描かれていると錯覚してしまったのです。それにしても、400年以上の長い間、多くの人々を信用させたのですから見事としか言いようはありませんね。

しかも、近代になって、『三千挺の鉄砲に三段撃ち』VS『勇猛果敢な武田の騎馬隊（ついには騎馬軍団とまで呼び名がエスカレートした！）』の戦闘が長篠の戦いの最大の特色であり、戦国時代の戦いの様相を一変させた、と多くの識者や歴史作家、さらには学者までが強く主張するようになったため、屏風図を疑うものはいないとい

う状態になってしまいました。でも、本当にそうなのでしょうか・・・。

4. 武田の『騎馬隊』、『騎馬軍団』はあったか？

中高年世代の皆様だったら“騎馬隊”と言えはすぐ浮かんでくるシーンがあると思います。それは、ハリウッド映画の西部劇のシーンです。今は、人種差別、先住民蔑視も甚だしいとして、騎兵隊とインディアンとの戦いがメインになるような西部劇はほとんど製作されなくなりました。しかし、1930年代～1960年代頃まではジョン・フォード監督：ジョン・ウエイン主演の西部劇が大手を振って歩いていました。その典型的な名作が、『駅馬車』でした。裸馬に乗って駅馬車を襲うインディアンの集団、必死に逃げる駅馬車、もうだめかという危機一髪の際に突撃ラッパの音色が聞こえ、ラッパ卒を先頭にした騎兵隊が颯爽と登場・・・まさに“手に汗握る迫力あるシーン”にワクワクしながら銀幕を眺めたものです。

ところで、武田軍は、このようなアメリカの西部劇の騎兵隊のように騎馬ばかりの“騎馬軍団”だったのでしょうか。これまで多くの人はこの西部劇の騎兵隊に武田の騎馬隊をダブらせて長篠の戦いをイメージしていたと言って過言ではないようです。その証拠に、20年ほど前に発行された『長篠の戦い』の解説本やムックを見ると、連吾川の右岸に設置された柵に向かって色とりどりの旗をなびかせた騎馬武者の集団が左岸の丘から駆け降りて連合軍に襲いかかるシーンが描かれています。これはまさに幌馬車を守る開拓者に襲いかかるインディアンの映画のシーンです。でも、誰もがこのシーンに疑問を持ちませんでした。いま、その当時の本を取り出して見えています。出版された当時は何も疑問を持ちませんでした。今、改めてその絵を見ると何か変なのです。まず、騎馬武者がまたがっている馬がどう見てもサラブレッドです。当時の馬は日本古来の馬ですから、サラブレッドのような競走馬ではありません。簡単に言うなら『木曾馬』のような脚の短い背丈の低い“ズングリムックリ”の馬の筈なのにです。

もうひとつ、数年前からガイドで馬防柵周辺を案内していて不思議に思うことがありました。この疑問は回を重ねるごとに大きくなっていったのです。それは、以下の3点です。

- ① 武田軍は騎馬で怒濤のように連合軍を攻めたと言われるが、季節は梅雨末期。ぬかるんだ田んぼや連吾川に馬の脚をとられて前進は困難の筈。戦いの素人ならいざ知らず、戦いに慣れた武田軍がそんな無謀な戦い方をしたのだろうか。
- ② 目の前に障害になる三重の柵が張り巡らされているのに騎馬だけで攻撃するようなバカな攻撃をしたのだろうか。武田軍はそんな無謀な（というより無能な）を戦いはしなかった筈。

③ 武田は多くの戦いをしているが、『騎馬軍団』が表面に出てくるのは長篠の戦いだけ。信玄が家康を完膚無きまでに打ちのめした『三方が原の戦い』でも、有名な『川中島の戦い』でも、騎馬隊の使用は出てこない。どうも、“鉄砲VS騎馬”の戦いを際立たせるためにことさら騎馬隊を強調したのではないだろうか。武田軍はここだけ特別に騎馬隊を集中させるようなことはできなかっただろうに・・・。

以上の3点です。一方、連合軍側に立っても疑問が膨らみます。地形がかなり複雑で左右の見通しはよくない。鉄砲の集中使用は理解できるが、こんな見通しの悪い場所で“三段撃ち”と言われるような統率の取れた一斉射撃ができるのだろうか。

ところが、これらの素朴な疑問に答を出してくれるような研究成果が近年発表されつつあります。私の疑問はおかしな疑問ではなかったのです。

5. バランスのとれた軍隊編成をしていた！

最近、“武田の騎馬軍団は虚構である”という研究報告がいくつかされています。そんな“天と地がひっくり返る”ような説をかなりスッキリと解説している書籍が何点か発行されています。それらの書物をもとにこれまでモヤモヤとしていた疑問のいくつかを説明してみます。

まず、最初に武田軍は騎馬中心の軍隊編成であったかという疑問です。実は、武田軍はそんな偏った部隊編成をしていませんでした。戦闘に臨む軍隊編成は、次のようであったとされています。

まず、『先手』と呼ばれる先頭集団が軍団の先頭に立ちます。それは鉄砲足軽で編成される『鉄砲衆』が先頭に、続いて弓足軽で編成される『弓衆』、さらに長柄の槍を持った長柄足軽で編成される『長柄衆』が続きます。これらの部隊が攻撃の先頭に立つのです。続いて『馬上衆』と言われる馬に乗った突撃部隊が続きます。その後ろに大将を取り囲む『旗本』が編成されますが、旗本も『弓・鉄砲衆』『長柄衆』を前面にして、その後ろに大将を警護する馬乗の武士『馬廻』が幾重にも重なり大将を守ります。さらに、その後ろは情報伝達役の『使番』（連絡将校）、部隊の存在を誇示する『幟持ち』、必要な武器弾薬や食糧を運ぶ『荷駄部隊』とそれを警護する徒士の武士が続きます。これは極めて合理的な部隊編成です。つまり、武田軍にも鉄砲隊も長柄隊も弓隊もあったのです。しかも、ここが大切な点なのですが、馬乗の武士一騎には多くの徒士の兵が従って小集団をつくっていたのです。ですから、ナポレオンの軍隊や日露戦争の時の日本の騎兵隊のように騎馬だけで集団を編成するということは不可能だったのです。つまり、

「騎馬武者だけが一団となって行動するよりも、騎馬武者は指揮官として徒歩武者を率いて戦うのが普通だった」

ということです。それが、いつの間にか“武田軍＝騎馬軍団”という実際にはあり得ない虚構の軍編成を私たちは信じていたのです。

さらに言うなら、騎馬は武田軍の象徴ではありませんでした。軍隊編成で騎馬の占める割合は武田軍が一番少なかったのです。騎馬の割合が一番高いのは関東平野を支配下におく北条軍でした。少し考えればすぐ納得できます。関東平野を駆け回って戦をした北条軍こそ馬の機動力が必要だったのです

6. 戦い時には武者は馬をおりて戦った！

さらに、おもしろいのは、当時は、

“武将が敵に向かって突進する時は下馬して進んだ”

のが常識だったようです。これについて、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルがイエズス会の本部の提出した報告書に記されているのです。

「この国（日本）には馬はいますが、侍たちは馬をおり徒士で戦っています・・・。」と記述されています。さらに、ザビエルの後輩で日本長く滞在して室町・戦国時代の日本について詳細な報告をしているルイス・フロイスは、

「われわれにおいては馬上で戦う。しかし、日本人は戦わねばならない時には馬からおりる・・・。」

と記しています。彼は信長にも謁見していますから、長篠の戦い当時の日本の戦闘の様式が当時のヨーロッパや近代の騎兵隊での戦いと違い下馬して戦うものであったことを示しています。

結論から言いますと、当時の感覚では、敵が崩れかかった時に追い撃ちをかけるとか、味方が負けそうになったときに乗って逃げるとかいう場合に馬を使うことが有効だと考えられていたようです。いい例があります。三方が原の戦いで壊滅的な敗戦をした家康は浜松城に馬に乗って逃げ帰りますが、そのとき、恐怖のあまりに馬上で脱糞してしまったことは有名です。このように逃げる時にこそ馬が使われたのです。ですから、“騎馬武者”はあったでしょうが“騎馬隊”はなかったと言えるようです。連吾川を挟んで延々と7～9時間にもわたる長時間の戦いは双方とも徒士の集団が中心でそれぞれ波のように繰り出され激突したと考えられます。ただ、そうした集団を防ぐ柵を何重にもつくり、多くの鉄砲で撃ちかけることを行った連合軍側が有利な戦いをしたことは予想されます。

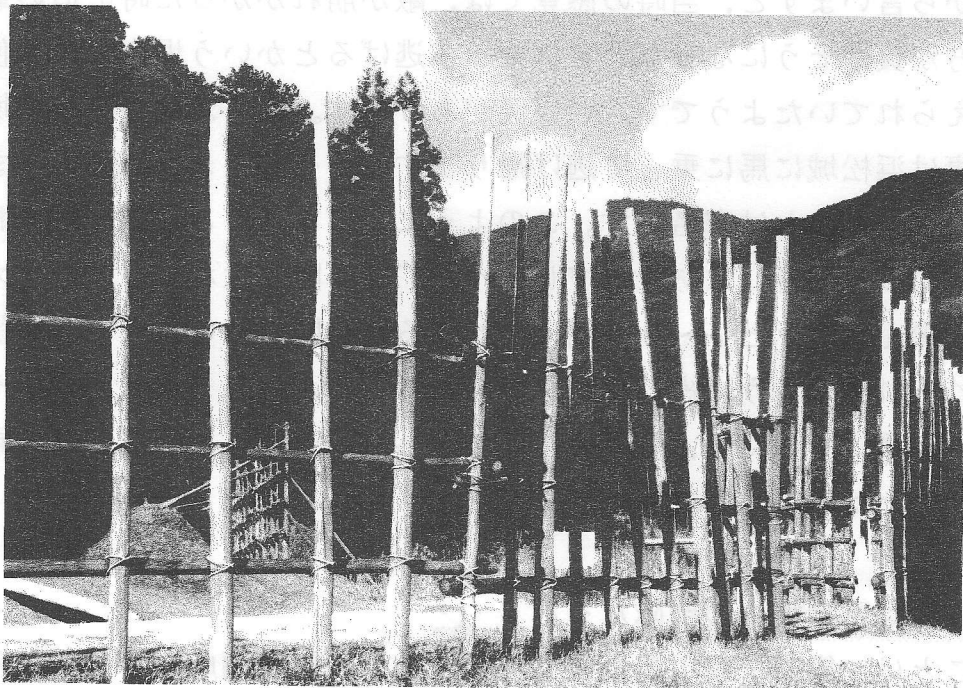
7. 鉄砲隊は寄せ集めの部隊だった・・・

同じことは、織田・徳川連合軍にも言えます。部隊編成にさほどの差があったとは言えないと思います。ただ、武田軍より多量の鉄砲足軽を持っていたことは事実です

が、鉄砲だけがこの戦いの帰趨を決めたとは言えないようです。

もし、鉄砲と騎馬の戦いであったなら、ごく短い時間に戦いは終わっている筈なのに実際は9時間近く死闘が繰り広げられたのです。戦死者の数は今となっては正確な数はわかりませんが、武田軍は多くの戦死者を出して敗走しました。しかし、連合軍もかなりの死傷者が出たことは様々な資料で明らかになっているのです。両軍が全ての武器を総動員して持てる力を振り絞って激突したのが『長篠の戦い』の真の姿と言えましょう。この解説にも記しましたが、織田信長はこの『長篠の戦い』に際して配下の大名に鉄砲足軽の動員を要請しています。そんな寄せ集め部隊に“三千挺の鉄砲による三段撃ち”などできる訳はありません。“鉄砲の三段撃ち”はTVや映画なら迫力満点のシーンになりますが、実際には小部隊の足軽部隊がそれぞれの指揮官のもとで死に物狂いになって撃ちまくったというところでしょう。

なぜ、織田・徳川連合軍が勝利したのかという理由は様々な説がありますから軽々に断言できませんが、ただ、織田信長は堺という国際貿易港を支配下に置いていましたし、鉄砲の一大生産拠点の近江の国友村も支配下でした。そうした有利な立場にあったことは見逃せません。また、この『長篠の戦い』に動員した総兵力が武田軍の二倍以上だったという点にやはり注目したいのです。総力と総力が死力を尽くしてぶつかるとしたら、最終的には物量がものをいいます。太平洋戦争でのガダルカナルの戦いでアメリカ軍が日本軍を圧倒したのはアメリカには日本に勝る物量があったからです。400年以上も前の戦争も基本は同じですね。

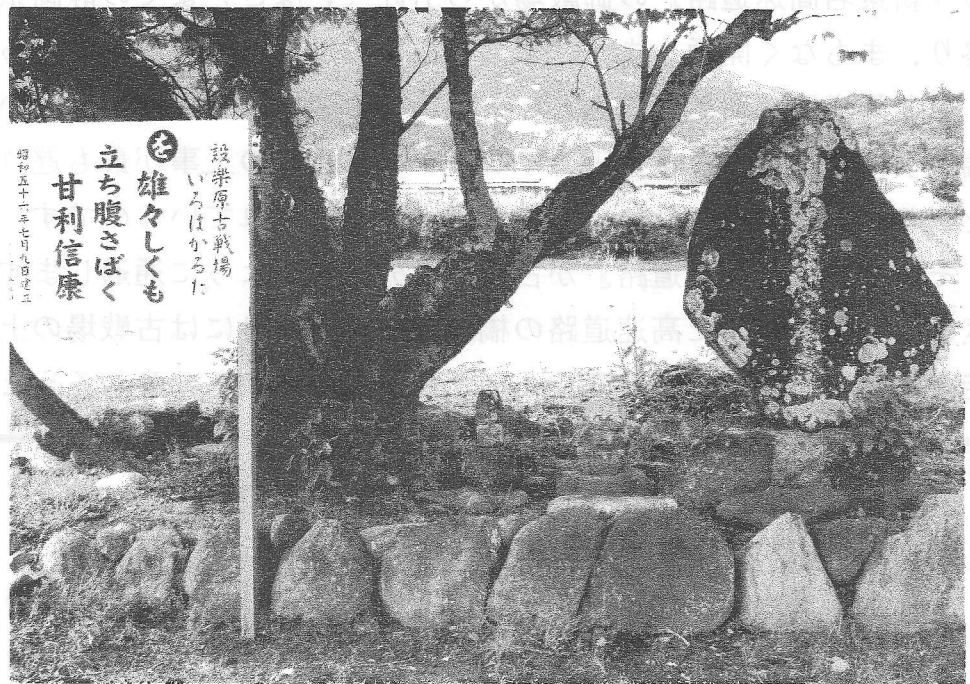


8. 戦いに倒れた将兵を今なお心を込めて祀る村人

いずれにせよ、戦いは5月21日の設楽原の決戦で織田・徳川連合軍が武田軍を完膚無きまで打ち破り、この戦いに敗れた武田家は滅亡へと転げ落ちて行きます。日本の歴史に残る大きな意味を持つ『長篠・設楽原の戦い』については語り尽くされた感がありますが、これから、今まであまり語られて来なかったことを少しだけ紹介してみたいと思います。

今、古戦場を歩くと、あちこちに下の写真のような看板と碑があり、碑のまわりは草が取り除かれ季節の草花が手向けられていることに気づくかと思います。下の写真は5月21日に両軍が激突した連吾川のそばにある碑で、この地で戦死した武田軍の将の一人甘利信康（あまのぶやす）を祀るものです。連合軍の兵士に囲まれ“もはやこれまで”と敵兵の前で自らの名を名乗り立ち腹をさばいて果てたと伝えられています。

戦いの後、武田から徳川の領地になったこの地なのに武田方の将兵は手厚く祀られているのです。450年の時の流れを超えて、今なお故郷へ戻ることのできなかった将兵はこのように手厚く祀られているのです。

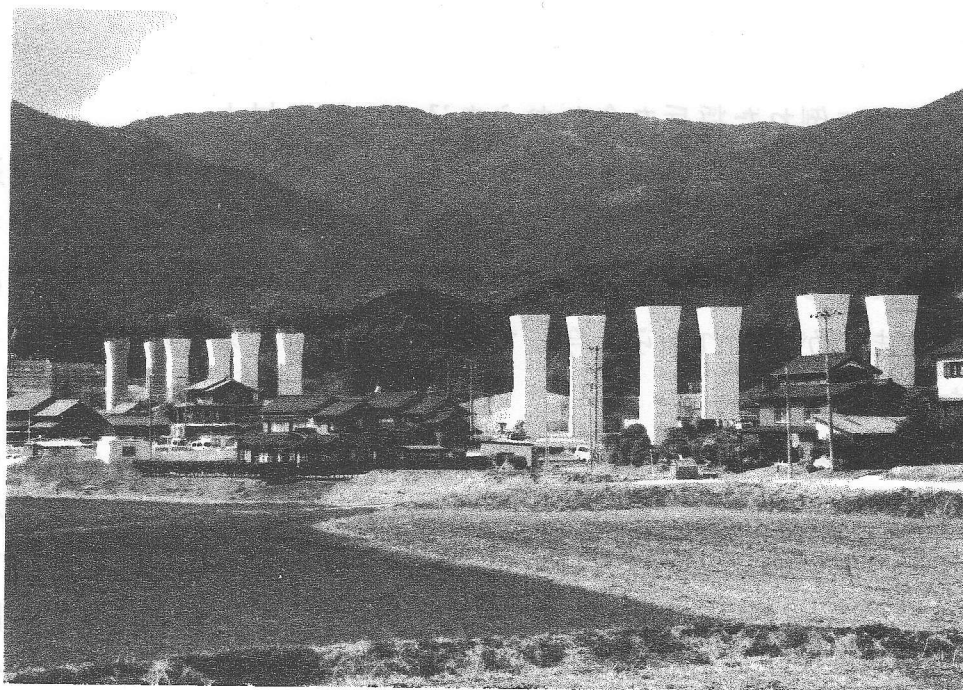


ですから、連合軍・武田軍を問わず、ここで倒れた主だった武将の碑は今なお古戦場のあちこちに見られます。また、こうした名だたる将兵だけでなく、両軍の戦死者を祀る『信玄塚』と呼ばれる大きな塚があります。そこでは、毎年のお盆に『火おんどり』という鎮魂の火祭りが行われています。

9. 時代の大きな流れの中に・・・

戦いが終り、平和が訪れました。そして、この地の支配者は次々に代わりました。そして450年の時が流れました。明治以降の近代化が進む中でも、この地の風景はほとんど変わりませんでした。

しかし、今、古戦場は激変しようとしています。それは、この『設楽原』の古戦場を貫くように『新東名高速道路』の建設工事が急ピッチで進められているからです。こ



の『新東名高速道路』の御殿場から引佐（いなさ）までの静岡県内はほとんど工事が終り、まもなく開通します。また、既に豊田ジャンクションから西へは伊勢湾岸道路・東名阪道路・新名神高速として名称こそ違いますが開通しています。静岡県の西端の引佐インターから豊田ジャンクションまでの工事が最も遅れていたのですが遅れを取り返そうとばかりに工事が急ピッチで行われているのです。

その『新東名高速道路』が古戦場を分断するように通過します。上の写真は須長地区に姿をあらわした高速道路の橋脚です。数年後には古戦場の上を多くのクルマが疾走する筈です。430年変化しなかった風景が大きく変わろうとしています。

予想外に若かった両軍の将

◎ 連合軍

織田	信長	41歳
	信忠	18歳
羽柴	秀吉	38歳
前田	利家	37歳
徳川	家康	33歳
	信康	16歳
本多	忠勝	27歳
酒井	忠次	48歳
松平	伊忠	28歳
奥平	定昌	20歳

◎ 武田軍

武田	勝頼	29歳
武田	信実	31歳
穴山	信君	34歳
真田	信綱	38歳
	昌輝	32歳
山県	昌景	46歳
内藤	昌豊	43歳
土屋	昌次	30歳
馬場	信春	60歳

10. 戦国の世の厳しい現実：戦場では『乱暴狼藉』が時として行われた

戦場へ出陣した将兵は、生きて戻れるという保証は全くありません。

特に、普段は農民とさほど変わらない暮らしをしている身分の低い兵士には“自分が戻らないと家族はどうなるだろう”という思いがあるだけに、死への恐怖心は強かったものと予想されます。そのため、戦いが長引いたり苦戦を強いられたりして兵士の士気が衰えそうになった時に、下級兵士の士気を高めるとともにストレス発散のために許した行為があります。それが『乱暴狼藉』（らんぼうろうぜき）でした。

「今から、乱暴狼藉を許す。ただし、刻限は〇〇時まで、範囲は▲▲村から△△村までとする。刻限・範囲を守らなかった者は厳罰に処する・・・。」

という触れが将官から発せられるのです。この触れが出されると下級兵士は雄叫びをあげて獣のように村に向かって突進しました。目的は村の食糧や家畜、金目なものを奪うことでしたが、女・子どもも対象になりました。運悪く見つかった女性は弄ばされたあげく、子どもとともに人買いに売り飛ばされました。私たちには信じられないことですが、軍団の進軍には物売り（タバコや酒や菓子などを商う）や人買いの商人がついていたと言われています。“乱暴狼藉”で得た物品や女性・子どもはこれらの商人に渡され、酒やタバコや菓子と交換されたようです。

この時代になると、全国の湊町や門前町や鉱山にはいわゆる“花街”があり、多くの遊女たちがそこで働かされていました。明日をも知れぬ船乗りや鉱山労働者には、優しく接してくれる遊女たちが唯一の心の拠り所だったのかもしれませんが。そうした“花街”で生きる女性の一部がこうした『乱暴狼藉』の末に売られてきたと考えても不思議ではないようです。

自軍の士気を高めるためとは言え、随分勝手な行為ですが、こうした行為が時々行われていたようです。ただし、この『乱暴狼藉』は敵地を荒すという作戦の意味もありましたが、こうした行為が頻繁に行われると、戦いに勝ったとしても支配地の農村は荒廃し人心は離れて行きます。そのため、“一定時間・一定範囲”という制限を設け、むやみに農民を襲ったり、農民の収穫物は略奪しないように規律は厳しくしたようです。それにしても、戦場になって土地が荒されるだけでなく財産や人を奪われるというとんでもない行為を受ける農民は大迷惑です。

11. 避難して『乱暴狼藉』から逃れる農民

農民は座して『乱暴狼藉』を受けていたわけではありません。

では、どのような対応をしたのでしょうか。それは“逃げて身を隠す”という方法でした。戦場になりそうだとすることが予想されると、まず最初に女・子ども、そし

戦場での兵たちはどんなものを食べていたのだろう

他国への遠征に従軍する兵士たちは食糧をどのように調達していたでしょう。攻めて行く土地から略奪するのは簡単ですが、それでは、後々のためにも良くありません。ですから、できるだけ自前の食糧を“荷駄隊”と呼ぶ部隊に運ばせました。しかし、全て“荷駄隊”任せではなく、特に下級兵士は自分で食糧もある程度は運んだとされています。

そうした携行食糧の中で一般的だったのは“干飯（ほしいい）”と呼ばれる一旦炊いた飯を乾燥させたもの。そのままでもかじれますが、水に浸せば柔らかくなり、湯で戻せば粥に近いものになります。しかし、干飯だけでは栄養が偏ります。特に長期の戦いで兵が悩まされたのはカリウム不足です。このカリウム不足を補い、併せて繊維質を摂取できるようにと考案されたのが“味噌漬け芋茎（ずいき）”です。

里芋の茎である芋茎は今も食材として利用されていますが、芋茎の皮を剥いて茹で上げます。それを味噌（赤味噌・信州味噌等、大名支配下の土地で使用されている味噌）床に漬け込み、芋茎に味噌をしみ込ませます。2～3日置いてしっかり味噌がしみ込んだ芋茎を風にさらして乾燥させます。そうしてできた紐状の芋茎は驚くほど丈夫な紐になります。兵はこの芋茎を何本も腰に巻いたり、荷駄を縛ったりと、様々な方法で多量の芋茎を戦場まで携行します。そして、いざ食事という時には、この紐の1本を腰から外し、細かく切って、鍋代わりの甕で食用できる野草とともに煮込むのです。出来上がったのは“芋がらの味噌汁”！、今のインスタント味噌汁の元祖です。

この味噌汁に干飯をぶちこめば、味噌雑炊が完成します。味噌・野草・芋茎と一緒に食すことで、不足しがちなカリウムやビタミン、更には繊維質の摂取ができるということになるのです。“芋がらの味噌汁”こそ戦場での必須アイテムだったようです。

さらに、現在の諸外国の軍隊や自衛隊が携行している高カロリーの携行食（戦闘食）に似た携行食もありました。それが“げんこつ飴”とか“痰きり飴”と言われている飴です。きな粉を熱く熱した水飴に練り込み、硬くならないうちに細かく裁断しただけの至って簡単なものですが、飴の高カロリーときな粉の高タンパクが兵たちの戦うエネルギーになったようです。一度、家庭でも“戦国時代の兵の食糧”にチャレンジしてはどうですか。

て行動の不自由な老人などの弱者を決められた場所に避難させました。その上で、残った男たちは農作物（特に種籾は大切です）を地下の穴蔵や山際に掘った穴に見つからないように隠した上で、農作業に欠かせない大型の家畜（馬や牛）を連れ、必要最小限の食糧と炊事道具や食器・衣類を持って隠れ場所におもむいたのです。

『長篠の戦い』の場合も同じでした。広範囲が戦場になったため、農民たちの隠れ場もいくつかあったと想像されますが、そのひとつが『出沢（すざわ）』地区の奥にある雁望の峰々に囲まれた『小屋ん久保』と呼ばれている地でした。確かに、そこは深い山々に囲まれた窪地で設楽原からも有海原からも長篠城周囲からも見えません。戦いがすみ、両軍が撤退するまで農民たちは『小屋ん久保』でひっそりと身を隠していたのです。

12. 『落武者狩り』も戦場では当然の行為でした・・・

“戦場の村”は、古今東西どこにおいても弱者が大きな被害を受けました。

あの太平洋戦争では、日本国内で唯一の地上戦が行われた沖縄がそうでした。アメリカ軍と日本軍の死闘が繰り広げられましたが、両軍の戦死者を合わせたよりも沖縄県民の犠牲者の方がはるかに多かったのです。ベトナム戦争でも、日本が中国に侵攻した日中戦争でも、古くはモンゴル軍がヨーロッパに侵攻した時でも同じでした。

戦国時代の日本では全国いたるところで戦いが行われました。戦いに巻き込まれた農民には“逃げて隠れる”しかなかったのです。さらに、追い打ちをかけたのが、治安が乱れていたため横行した野武士や夜盗でした。その様子を私たちにリアルに伝えたのが、名匠黒沢明監督の『七人の侍』です。毎年、秋になると村を襲う野武士集団を防ぐために、農民がサムライを雇って対応するという実際にはあまり考えられない方法ですが、リアルな映像が私たちにワクワクさせました。

では、実際の農民はどうだったのでしょうか。逃げて隠れてばかりだったのでしょうか。そうでもなかったようです。武士が強い戦闘集団の時には従順な農民でしたが一旦戦いに敗れて落ち延びる武士に対しては情け容赦なく襲いかかるという行動を取ったのです。これが『落武者狩り』です。まるで、傷を負った大きな野生動物を狙うハイエナのような行為ですが、だからと言って農民を責めるのは酷です。これは『乱暴狼藉』に対抗する農民の唯一の手段だったのです。あの『七人の侍』でも、三船敏郎演じる菊千代が、農民たちが隠し持っていた鎧・兜・槍・弓矢などを六人の侍の前にドサッと投げ出し、

「百姓ってのはこんなもんだ！」

と叫ぶシーンがありますが、真実の姿だったかもしれません。

13. 長篠の戦いの悲話：望月重氏と望月峠の由来

この『長篠・設楽原の戦い』でも、武士と農民がかかわる悲話が残されています。そのひとつが望月重氏の話です。簡単に紹介してみたいと思います。

1575年（天正3年）5月21日の設楽原（したらがはら）の決戦で、武田軍は壊滅的な敗北をしました。特に、この戦いで、信玄・勝頼と二代にわたって従って数多くの戦いで武勇を轟かせた有能な武将の多くを失ったことは大きな痛手になり、これが武田氏の滅亡を早めたと言われています。

そうした武将の一人に、信濃の国望月城の城主『望月義勝』がいました。望月義勝（望月重氏とも言います）は設楽原の決戦で多くの家臣を失いましたが、戦死することなく退路を開き、故郷望月城に向かいました。勝頼や生き残った多くの家臣が寒狭川筋を遡り伊那街道を甲斐の国に向かったのに対して、厳しい落ち武者狩りを避けて主従のたどった道は宇連川沿いの細く厳しい道（現在の国道151号）でした。しかし、追手の追撃で次々に家臣を失い、戦場から60kmほど離れた現在の北設楽（きたしたら）郡の山裾にある御園（みその）村の近くにたどり着いた時には主従は僅か5名になっていました。

時は夜になっていました。疲れ果てた主従には夜間に険しい峠を越えて信濃への道を歩く力はもはや残っていませんでした。警戒はしたものの野宿をして夜明けと同時に峠越えをしようと考え、力をつけようと二人の家臣が水と食糧を求めるためにそと一軒の村人の家を訪ねました。対応した老婆は、

「さぞ、お困りであろう。この地は昔から武田家の領地、大將がみえるならうちに泊めてあげようほどに・・・。」

と、豆などの食糧を提供するだけでなく、親切に対応しました。しかし、あまりに調子のいい対応に不信感を持った家臣の一人が様子を伺うことにしました。案の定、老婆は重氏の家臣が去るのを確かめると、名主の元に走りました。猶予はできません。明朝には落ち武者狩りが行われることは必至の状況です。

家臣は急いで望月重氏のもとに走りました。望月重氏は、

「さもあるう。では夜のうちに逃げられるだけ逃げよう。できることなら、故郷信濃の国からの風が吹き通る御園峠までは行きたいものだ・・・。」

と、馴れない夜の峠道をたどることにしました。しかし、峠に達する前に夜が明けてしまい、馴れた山道を先回りされた村人50名程に取り囲まれてしまいました。必死に戦ったものの家臣は次々に討ち死にし、望月重氏も追手に囲まれてしまいました。重氏は村人に大声で呼ばわれました。

「余は信濃国望月郷の国守望月甚八郎重氏である。力尽きてここで死ぬのは残念であるが致し方ない。最後にただひとつ願いがある。余はここで腹を切って死ぬから、

首は徳川方に持って行き手柄にせよ。ただ、余の遺体を峠の上に埋めて貰いたい。余は故郷の信濃からの風の吹いて来るところで眠りたいのだ。」

望月重氏は言い終わると、村人たちの前で立ち腹を切って相果てました。ここまで従って来た家臣も後を追って自害しました。

落武者の着ている物や鎧・兜など所持品は村人たちが先を争って奪い取り、首は五つ揃えて徳川方に送られました。重氏の最後の願いは聞き入れられませんでした。身ぐるみ剥がされた5人の遺体は藪の中に蹴こまれたまま腐りはてたのです。

ところが、それから一か月半後、7月になって村は大変なことになりました。村に悪い流行り病が（多分赤痢？）が発生し流行したのです。まず、落人を裏切った老婆の一家が全滅しました。それだけではすみませんでした。村人が次々に命を落として行くのです。村人たちは恐れ戦きました。

「間違いない、望月様の祟りだ！」

「あんなことをしなければよかった。褒美を貰ったのは名主だけ、それなのに、村では既に20人が死んだ。まだまだ病の床についている村人はたくさんいる。これからどれだけ命を落とすかわからない。このままでは村は全滅してしまう。なんとかして、望月様主従の霊を慰めなければ・・・。」

村人たちは谷底に散らばっていた5人の遺骨を峠の頂上に運び、奪ったものは全て遺骨とともに丁寧な葬りました。

やがて赤痢はおさまり、村には再び平和が戻りました・・・。その後、しばらくして、御園峠は誰言うことなく『望月峠』と呼ばれるようになり、峠の碑には常に花が供えられるようになりました。

今も国土地理院の2万5千分の1地形図『見出』を見ると、望月峠と記載されています。【本資料の地図をご覧ください。】

14. 戦場の地に住み着いた望月氏の一族は・・・

この話は、新田次郎の大作『武田勝頼』の第二巻『水の巻』に紹介されています。でも、これで終りではないのです。この悲しいできごとの後日談を紹介してみたいと思います。

「武田軍は三河の長篠で大敗した・・・。」

「あの家でも主は戻って来ない・・・。」

という噂が甲斐の国、信濃の国、上野の国で広がりました。望月重氏の留守を守る一族も帰ってこない主、重氏のことを気づかうものの消息は一向にわかりません。重氏は武田の本隊と別れ、宇連川に沿って逃れ御園で主従共々討たれてしまったため消息が伝わらなかったのです。

戦いが終わってもなく、望月家から選ばれた代表一人と従う者数人が危険を冒して敵地となった三河の長篠へと赴くことになりました。落武者狩りはまだ続いていますから、農民に身を隠しての決死の出発です。ちょうど、重氏が御園の山奥で打ち捨てられていた時期に重なるのですが、そんなことは知る由もありません。

戦場に着きました。あちこちに仮埋葬された侍の土饅頭が幾つも見られ、真夏のことですから、そこからは異臭が漂い、血糊のついた旗指物が散乱していました。あまりの惨状にことばを失いました。それでも、望月重氏のことを求める一行は何か手があるのではないかと戦場を毎日彷徨いました。消息はわかりませんでした。彼らがそこで見た農民の姿に大きな感動を得たのです。

農民は、田畑が戦場になり大きな被害を受けたのにもかかわらず、農民たちは何を置いても遺体を丁寧に葬ることに汗を流していました。それがすんでから、荒された田をもとに戻して遅れた田植えを始めようとしていたのです。この戦いで、この地方一帯は武田方から完全に徳川方の地になったのですが、村人たちは武田方の武者をよりねんごろに弔っていました。

「故郷を遠く離れて命を落としたことはさぞ悔しかろう。誰も弔ってくれないのだから、俺たちがやっている……。」

この姿を見て主従は決断しました。

「御館様始め御一族の方々はこの地で命を落とされたに違いない。どこでどのような最期を遂げられたかはこれから一生かかって、いや子々孫々にまでかけて必ず明らかにしよう。そして、一族の霊を慰めるためにここに住み着こう。」

という決断です。武田方についての武将の身分を隠し、農民として戦場の片隅にひっそりと住み着いたのです。

それから、400年近くの時が流れました。天下統一を成し遂げたかにみえた織田信長も豊臣秀吉も姿を消し、日本を統一した徳川幕府さえ滅びました。古戦場の片隅で一族の霊を祀っていた望月家はどうなったのでしょうか。勤勉なゆえにしだいに財をなしこの地方での豪農として認められる存在になりました。ただ、

『このつづらは絶対に開けてはならぬ』

とされた葛（つづら）が望月家当主に伝わっていました。不思議なこの葛に手をつける者はいなかったのですが、太平洋戦争後、禁断の葛が開けられたのです。その中に入っていたのは望月家が武田家ゆかりの家柄を誇る信濃の国の望月家の分家であることを記した文書の数々でした。学者の調査も行われました。

「口伝で代々当主に伝えられていたことでしたが、本当のことであることを証明する文書が出てきて驚いた……。」

と、当時の主は取材に訪れた報道陣に語っています。

実は、この地（旧鳳来町の長篠城址に近い場所）に住み着いた望月一族は江戸後期には宇連川を行き来する物資の流通を束ねる回船問屋として大きな富を得ます。そして、地域の交通のために明治になってから街道を整備し富を地域に還元しています。この街道の名は『望月街道』と呼ばれています。

今、古戦場に近い山裾に大きな家を構える望月家では、毎年行われている行事があります。それは、望月重氏の命日とされる日、一族揃って望月峠へ登るのです。先祖の望月重氏の霊を慰め子孫が繁栄していることを報告するためです。

現在、日本の地図に望月の名がいくつか見られます。一つ目は、もともとの望月氏の拠点であった長野県の中山道の宿場の望月、そして非業の死を遂げた重氏を祀った望月峠、さらには奥三河の街道『望月街道』です。この三つの地名が互いに関連していることを知っているのはどれだけいるのでしょうか。長篠の戦いの古戦場に住む心優しい人々の多くは知っていますが・・・。

※ この望月家の話を徹底的に調べて事実であることを証明したのは、長篠城址史跡保存館初代館長の故丸山彭氏の力です。新田次郎は『武田勝頼』を執筆する際に、丸山彭氏を何度訪ねられたとのこと。その取材がベースになって、『水の巻』の“落武者哀れ”になっているようです。この項については丸山氏の著書：『長篠合戦余話（長篠戦史資料その五）』を参考にしました。

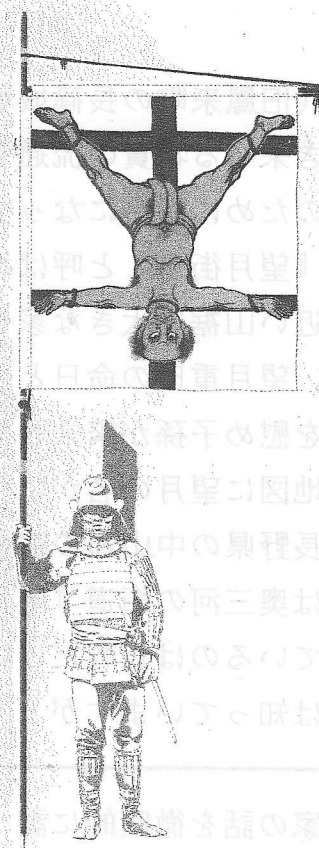
15. 鳥居強右衛門勝商と鈴木金七

長篠の戦いでヒーローは誰でしょうか。

僅か五百の兵で武田軍の猛攻を耐えた奥平貞昌でしょうか。同じく連合軍の将で、鷲ヶ巣山への奇襲作戦を信長に進言し、自ら奇襲部隊の先頭に立って鷲ヶ巣山の奇襲攻撃に成功し、連合軍の勝利に貢献した酒井忠次でしょうか。それとも、敗色濃い中、主君武田勝頼を無事に戦場から離脱できるように最も困難な役目の『殿』（しんがり）をつとめ、僅か700の手勢で徳川軍の猛追を防ぎ、主君が無事危機を脱するのを見て、自らの首を差し出した馬場信房でしょうか。唯一、三重の馬防柵のうち二つまで突破し、最後の馬防柵に取り付きながらも鉄砲で打ち倒された武田軍の猛将土屋昌次でしょうか。

多くのエピソードがある『長篠の戦い』ですが、最高のヒーローはやはり鳥居強右衛門勝商かもしれません。彼は、前述した将とは違い軽輩の足軽です。厳しい言い方をすれば、単なる雑兵で使い捨てられる身です。それが、ヒーローになったのは、厳

落合左兵次



しい包囲網をかいくぐって脱出に成功し、城の窮状を家康・信長に伝えたこと、さらに、それで任務は終了した筈なのに再び城に戻ろうとして捕まり、死を覚悟して城兵に“援軍きたる。あと僅かの辛抱”と伝え、遂には磔刑に処せられたこと、と、5月14日～16日のたった三日間でしたが、彼の行為全てが劇的な行動だったことが今なお最高のヒーローとされる所以かと思います。

ところで、包囲された城を脱出し岡崎に向かった使者は鳥居強右衛門勝商だけでなく、もう一人『鈴木金七』がいたと史料にあります。それが鳥居勝商だけがクローズアップされてきたのは、鳥居勝商の劇的な最期があったからでしょう。

【これが真の旗指物では？】

自らの命を賭けてまで城兵に真実を伝えた鳥居勝商の行為は武田軍の将兵にも大きなインパクトを与えたことは、戦時中は武田軍に属し、武田氏が滅亡した後に徳川氏に仕えた落合佐平次の旗指物に磔刑にされる鳥居勝商を描かせたことでよくわかります。この落合佐平次の旗指物が鳥居勝商のイメージとして私たちに深く焼きついているのです。ところで、この旗指物の現物は現在、千葉県佐倉市にある『国立歴史民俗博物館』に所蔵されています。最近、この旗指物についての研究が進み、従来の私たちの常識をひっくり返す説が発表されました。それは、

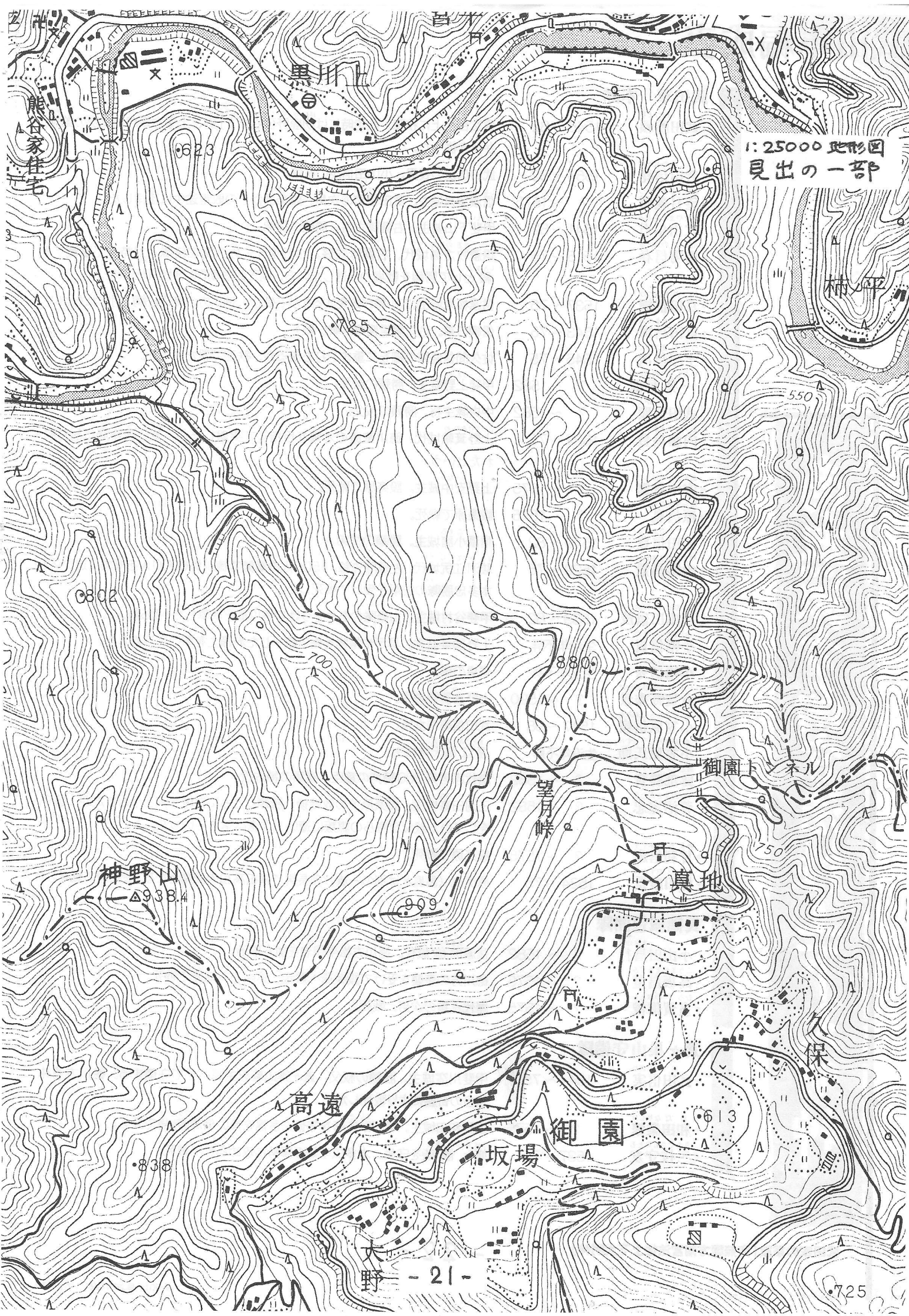
「現在、日本中に流布されている鳥居勝商の磔刑の旗指物は天地が逆ではないだろうか。その証拠は・・・。」

というのです。つまり、鳥居勝商は単純な磔刑ではなく、最も残虐な“逆さ磔”の刑に処せられたのではないかと言うのです。一番の証拠は旗の上部にある竿を通す部分の縫い代が従来『地』の部分、つまり磔にされている鳥居勝商の足元にあるのです。

さて、城を脱出して使命を果たした二人ですが、『鈴木金七』はその子孫が作手地区に健在ですし、鳥居勝商の子孫は豊川市市田町に子孫が住んでいます。菩提寺である市田町の清龍山松永寺には鳥居家代々の墓があり、歴史愛好家が時折訪れて墓前で頭を垂れて行くそうです。

そうそう、もうひとつ、鳥居勝商は脱出成功を伝えるために狼煙を上げますが、狼煙の伝達速度はどのくらいだったのでしょうか。想像以上に早かったのですよ！

1:25000 地形図
見出の一部



武田軍 本隊

武田勝頼	1546 ~ 82	信玄台地上に布陣。敗走時には初鹿野伝右衛門尉と土屋右衛門尉昌次の弟窓が付き従った。
武田信堯	1554 ~ 82	武田信友の長男。小山田信茂の妹婿。
望月義勝	? ~ 1575	信濃望月城主。武田信繁の次男。設楽原からの敗走途中に落命した。
穴山信君	1541 ~ 82	甲斐下山城主。右翼隊主将。勝頼の従弟。
馬場信春	1515 ~ 75	信濃牧之島城代。右翼隊先鋒。水野信元・佐久間信盛隊と対峙して奮戦する殿として勝頼を戦場から逃したのち、岡三郎左衛門に討ち取られた。
真田信綱	1537 ~ 75	信濃松尾城主。穴山勢が敗走するなかで孤立し、徳川方の渡辺政綱に討たれたといひ。
真田昌輝	1543 ~ 75	信綱の弟。佐久間信盛隊と戦い戦死。
土屋昌次	1545 ~ 75	佐久間信盛隊の柵を二重まで打ち破るが、鉄砲で撃たれ戦死。
一条信龍	? ~ 1582	甲斐上野城主。勝頼の叔父。
武田信廉	? ~ 1582	中央隊主将。勝頼の叔父。
内藤昌豊	1522 ~ 75	上野箕輪城代。徳川家康の本陣を目指して突撃したが、朝比奈泰勝に討ち取れたという。
安中景繁	? ~ 1575	上野安中城主。設楽原で戦死。
原昌胤	? ~ 1575	設楽原で戦死。
武田信豊	1549 ~ 82	信濃小諸城主。勝頼の従弟。
山県昌景	1529 ~ 75	駿河江尻城代。左翼隊先鋒。1500人の軍勢で徳川勢6000人を柵内に追い込め本多忠勝隊の銃撃を受けて戦死した。
小山田信茂	1539 ~ 82	甲斐谷村城主。山県隊のあとをうけて徳川軍を攻撃したが敗退した。
小幡信貞	生没年不詳	上野国峯城主。具足や指物を朱で統一した赤備えを率いて攻撃した。
小幡信秀	生没年不詳	信貞の弟。
倉賀野秀景	? ~ 1590	上野倉賀野城主。
小笠原信嶺	1547 ~ 98	武田信廉の女婿。
小笠原氏助	生没年不詳	遠江高天神城主。
跡部勝資	? ~ 1582	譜代家老衆300騎持の重臣。勝頼の補佐役。
菅沼定忠	? ~ 1582	三河田峯城主。設楽原での敗戦後、勝頼とともに自城へ入ろうとしたが、留守をしていた叔父定直らの謀叛に遭い、信濃へ落ちていった。
甘利信康	? ~ 1575	設楽原で戦死。
横田康景	1524 ~ 75	原虎胤(昌胤とは別の一族)の長男で横田高松の女婿となる。設楽原で戦死した。

長篠城包囲隊

小山田昌行	? ~ 1582	信濃尼飾城代。徳川方松平伊忠を討ち取る。
高坂昌澄	? ~ 1575	徳川方の奇襲を受けて設楽原へ敗走、途中の有海原で戦死。
室賀信俊	? ~ 1575	屋代正重の次男。戦死。

鳶ヶ巣山守備隊

武田信実	1544 ~ 75	甲斐川窪城主。勝頼の叔父。鳶ヶ巣山砦を主将として守備する。徳川方酒井次らの奇襲により戦死した。
和田業繁	? ~ 1575	上野和田城主。君が臥床砦を守備、重傷を負い信濃駒場で死去。
三枝守友	1537 ~ 75	姥ヶ懐砦を守備。本多広孝等の軍勢に攻められて戦死。

織田軍 本隊

織田信長	1534 ~ 82	極楽寺山に布陣。
織田信忠	1557 ~ 82	信長の長男。新御堂山に布陣。
佐久間信盛	? ~ 1581	尾張山崎城主。武田方の馬場・真田・土屋勢に押された。
水野信元	? ~ 1575	尾張緒川城主。徳川家康の生母於大の方（伝通院）の異母兄。
安藤守就	? ~ 1582	美濃北方城主。美濃三人衆のひとり。
氏家直昌	? ~ 1583	美濃大垣城主。美濃三人衆のひとり氏家直元（卜全）の長男。
稲葉良通	1515 ~ 88	美濃曾根城主。美濃三人衆のひとり。長篠の戦いでは朱鎧を着し、朱柄の長槍を持って出陣。信長から「今の弁慶なり」と賞賛された。
佐々成政	1539 ~ 88	尾張比良城主。黒母衣衆として鉄砲隊を指揮した。
前田利家	1538 ~ 99	尾張荒子城主。赤母衣衆として鉄砲隊を指揮した。
河尻秀隆	1527 ~ 82	美濃勝山城主。小瀬南庵の『信長記』によると、信忠の補佐の役割をはたしていたという。
丹羽長秀	1535 ~ 85	近江佐和山城城主。滝川一益・羽柴秀吉とともに織田勢の右翼に布陣した。
滝川一益	1525 ~ 86	伊勢長島城主。武田信豊・一条信龍隊と対峙。
羽柴秀吉	1537 ~ 98	近江長浜城主。山内一豊・堀尾吉晴・中村一氏らを率いて参陣。

織田信長の軍旗

徳川軍 本隊

徳川家康	1542 ~ 1616	弾正山（現在の断上山）に布陣。
徳川信康	1559 ~ 79	家康の長男。松尾山に布陣。
石川数正	? ~ 1593	三河土呂城主。酒井忠次とともに家康の老臣。
平岩親吉	1542 ~ 1611	三河坂戸城主。柵を出て敵陣へ突撃した。
榊原康政	1548 ~ 1606	石川数正・大須賀康高・本多忠勝・鳥居元忠らと敵陣へ突入を図る。
本多忠勝	1548 ~ 1610	山県昌景隊の攻撃を鉄砲で迎え撃ち、昌景を討ち取る。
鳥居元忠	1539 ~ 1600	家臣永田蘇夫之助らを率い、馬場信春らの軍を破る。武田の将望月某を討ち取った。
内藤家長	1546 ~ 1600	三河姫小川城主。設楽原での合戦が始まる直前、武田方の斥候を見つけて追撃した。
内藤信成	1545 ~ 1612	家長の庶兄、家康の異母弟。大久保忠世らとともに先手の侍大将となる。戦場における信成の働きは信長の目にもとまり、信長への拜謁を許された。
本多重次	1529 ~ 96	「鬼作左」として恐れられた猛将。設楽原では敵7、8騎の中に単騎で突撃。敵将2騎を討ち取ったが、全身7か所を負傷したうえ右目を失った。
大久保忠世	1532 ~ 94	三河羽根城主。「右府（信長）の兵をして先駆たらしむにおいては我君（家康）の恥なり」と言い、徳川勢の士気を鼓舞したと伝わる。柵の外に出て、数百挺の鉄砲で武田軍の左翼先鋒山県昌景隊を攻撃した。
大久保忠佐	1537 ~ 1613	忠世の弟。兄から兵を分かち与えられ、麾下の鉄砲隊を指揮した。

長篠城籠城隊

奥平貞昌	1555 ~ 1615	三河長篠城主。500の城兵で武田軍の猛攻を凌ぐ。徳川方の酒井忠次らの奇襲に乗じて城から出撃した。
奥平貞友	生没年不詳	三河日近城主。
松平景忠	1545 ~ 97	三河五井城主。徳川家康から援将として送り込まれた。

鷲ヶ巣山攻撃隊

酒井忠次	1527 ~ 96	三河吉田城主。4000の兵を率いて鷲ヶ巣山砦を急襲した。
松平伊忠	1537 ~ 75	三河深溝城主。武田信実を討ち取る功をあげたが、追撃中に武田方小山田昌行の反撃に遭い戦死した。
本多康重	1554 ~ 1611	先登して2か所に怪我を負う。左の股を鉄砲で撃たれ、生涯、弾が股の中に入ったという。

